

家族看護介入研究—実践から理論を生み出す—

千葉大学医学部附属病院 吉田千文

家族看護介入研究の現状：Wright¹⁾は1993年に当時の家族看護研究を概観し、家族看護学の将来は介入研究にあると述べ、介入研究の重要を強調した。それから今日までの約10年間に、我が国では家族看護理論やモデル、心理社会学領域の理論を用いた家族看護援助が行われるようになりその効果についての報告が数多くなされてきた。また妊娠・産褥期の母子関係、高齢者介護、終末期ケアなど特定の状況下にある家族への家族看護実践理論の開発研究も行われている。しかしまだ数少ないのが現状である。その理由には、複雑な家族現象を捉えることや看護援助の効果を見極めることの困難さを挙げることができる。

家族変化の複雑さと帰納的方法による事例研究の重要性と有用性：家族はそれぞれに異なる人間が異なる関係の持ち方で結びついており、個々の家族がユニークである。また家族の変化は、看護師と家族との相互作用によって、まず家族を構成する個人と個人間の関係に質的な変化が生じ、さらに変化した個人あるいは個人間の関係が他の個人や個人間の関係と有機的に影響しあうことを通して、家族全体に進展していくと考えられる。一方、家族に対する看護援助は、相互作用場面における個人及び家族の状況、あるいは看護師の行為に対する反応の把握、その意味の解釈、そして変化を意図した看護師の行為によって構成される一連の循環するプロセスであり、家族の変化とともに看護援助も変化する。したがって、これらの家族看護援助そしてその効果の複雑な様相を明らかにするためには、現実の家族看護実践に目をむけ、そこから帰納的に理論を生み出す事例研究方法は、極めて重要かつ有用といえる。

看護実践から家族看護援助理論を生み出す研究の例：筆者の家族看護研究「手術を受ける老人がん患者の家族の成長を促す看護援助」²⁾の具体的な研究方法を示す。この研究の目的は、老年期での癌罹患と手術によって、高齢者とその家族員の実存的な問題への直面、不確かながん療養への不安、老親と成人した子の関係の変化といった家族を危機に陥れる状況において、家族が癌罹患を糧として成長していくことができるための家族看護援助を見出すことである。研究方法は、研究者が個別の家族に対して、家族の成長を意図した看護援助を実践し、援助過程で収集した家族の状況と看護師の思考・行為についてのデータ分析から、手術を受ける老人がん患者の家族の成長、家族の成長を促した看護援助、そして看護援助の効果を明らかにする質的帰納的研究方法をとった。研究は次の2段階から構成される。①研究者の看護実践を方向付ける理論的な基盤を明確にする段階、②家族看護援助を展開し、同時に参加観察法、面接法等で家族内の個人、個人間の関係、全体の家族に関するデータ、及び看護師の関わりに関するデータ収集を行い、個別家族ごとの事例分析と全対象家族の分析結果を統合し、結果を導き出す段階。

今後の研究に向けての課題：①研究者の家族看護実践能力、②膨大な質的データ整理と分析に要するエネルギーと時間、③データ分析の複雑さと真実性確保、④「家族」の把握方法、⑤「家族」の研究参加の承諾、⑥研究フィールドの確保。

文献：1)Wright,L.M. and Bell,J.M.:The Future of Family Nursing Research; Intervention, Intervention, Intervention(家族看護学研究の未来), 看護研究, 27(2-3),4-15,1994. 2)吉田千文:手術を受ける老人がん患者の家族の成長を促す看護援助, 千葉大学大学院看護学研究科博士論文,1999.